

ダーリンは  
やきもちやき。



椎名花穂

ここは一組の大学生夫婦の住むマンションの寝室です。

晩婚な世の中にもかかわらず、二人の関係はれっきとした夫婦です。

そもそもこの二人にとっては世の中のことなど、全く関係なく今日も今日とてラブラブな二人なのです。

ダーリンの名前は草野翔、奥様の名前は草野明里、二人とも年齢は20歳の学生でもあり

そして同じ大学に通う何度も繰り返しますが夫婦です。

さて時計を見てみると現在の時刻は8：30分。

今日の講義は二人とも一限目から入っており、授業開始時刻は9時からです。

そんな二人の寝室をこっそり覗いてみると二人ともまだ夢の中みたいです。

起きる気配がないのですが、大丈夫なのでしょうか。

ダーリンと奥様の手を見ると、二人の手はしっかりとつながれている状態です。

他の人が見ると少し呆れてしまうような光景ですが、この二人にとっては当たり前のことなのです。

奥様の方を見るとどうやら覚醒が近いらしく、布団の中でモゾモゾト動き出したようです。

奥様は寝ぼけ眼で時計に手を伸ばし時刻を確認しています。

開ききれてはいない目と、回らない頭で時計を見て、1秒、2秒、3秒と凝視しています。

「キャー！！8：40分！！」

次の瞬間には悲鳴を上げながらも転がるようなスピードでベッドから起きあがりました。

奥様は急いでクローゼットから洋服を出して着替えると、寝室からリビングへと行きました。

残されたダーリンはというと。

無意識に奥様の居たところを手で探しているみたいですが、見つかりません。

ダーリンの頭の中はというと、

「……。」

どうやら回っていないみたいで、次第に手の動きも止まり睡眠の再開です。

現在の時刻8：45分。

リビングにいた奥様が戻ってきました。

戻ってきた奥様を見るとどうやら準備ができたようです。

そして「どれにしようかなあ〜。」と言いながら、ダーリンの洋服を選んでいきます。

いつものダーリンは自分で服を選んでいますが、今日ばかりは仕方ありません。

奥様はダーリンの服を選び終わるとベッドに近づきダーリンを起こします。

「翔、起きて。遅刻しちゃうよ。」

愛しい奥様の声を聞いてもダーリンは目を覚ます様子がありません。

「翔ーってばあ。」

呼びながらダーリンの肩を揺らしますが、全く効果がないようです。

「今日の翔ちゃん手ごわすぎ。」

そこで奥様は強攻手段にでることにしました。

「翔が起きないのだったらこっちにも考えがあるからね。」

そういと、奥様は勢いよく布団をめくりました。

これには絶大な効果があったようです。

ダーリンは急に布団がなくなったことで今までの暖かさが消えて寒くなったのでしょうか。

ダーリンは目をショボショボさせながら、奥様を見ます。

「どうしたの？」

ダーリンはまだ寝ぼけているようなので、トンチンカンなことを言います。

「どうしたのじゃないよ。今日一限目から学校に行く日だよ。」

奥様は寝ぼけているダーリンに少し呆れながら答えました。

「何時？」

「翔がなかなか起きないからもう8：50分だよ。はい、翔の服は出しておいたから急いで着替えて。」

ダーリンに服を渡し、部屋から出て行こうとする奥様をダーリンが呼び止めました。

「おはようのキスは？」

遅刻するかもしれないこの状況の中、ダーリンの発言はまったく緊急性を感じません。

しかしこの二人は学生夫婦でもあり、新婚さんでもあるのです。

なので、多少のバカップル（夫婦）でもダーリンを温かい目で見てあげてください。

「今日は時間ないからダメ。それに何度も呼んだのに翔なかなか起きてくれなかったもん。」

「明里一。」

「そんな声出してもダメ。」

ダーリンは奥様にキスしてもらうために甘い声で奥様の名前を呼びます。

「明里ちゃん。」

ダーリンはまだまだ諦める様子がありません。

「……………」

「いいよ、してくれないなら今日は学校に行かない。」

なんとダーリンは布団に逆戻りだけでなく、登校も拒否です。

「翔の我がまま。」

「なんとでも。」

ダーリンは得意げな顔です。

それを見た奥様は諦めました。

こういうときはダーリンのほうが一枚も二枚も上手なのです。

諦めた奥様は渋々ダーリンのホッペにキスを一つプレゼントしました。

「そっちじゃなくて、こっち。」

そうやってダーリンは手で口を指しました。

けれど奥様もやられっぱなしではないのです。

「じゃあいいよ、翔は行かなくても。一人で大学行くから。」

奥様は今度こそ寝室を出て行ってしまいました。

こんなことを言われれば大学には行かないのかと思いきや

ダーリンはやっと重い腰を上げ、準備に取り掛かりました。

ダーリンが大学に行く気になったのには理由があるのです。

なぜならダーリンは奥様のことが大好きで、そしてやきもちやきなのです。

奥様が一人で学校に行ったり、自分が居ないところに奥様が一人で行くのが心配でしかたがないのです。

何を言っているのだと思った人もいるでしょう。

しかしダーリンは奥様が大好きなだけのです。

ダーリンにとって奥様はとっても大切な存在です。

だから心配でしようがないのです。

奥様は明るく、そして容姿も可憐で、男女問わず友人も多いので、

外にはダーリンにとってのライバルが大勢いて気が抜けないのです。

漸くダーリンは着替え終わると、寝室を出て、そして洗面所で身支度を終わるとリビングに行きました。

「行かないんじゃないの？」

奥様が仕返しにちょっぴり憎まれ口をたたきます。

「そんなこと言ってない。」

奥様は必要なものを持ち、玄関に向かいます。

ダーリンもそれに続きます。

奥様が靴を履き終えた頃ダーリンはいつもの玄関での儀式ともいえる

“行ってきますのキス“をしてもらおうと思っていました。

しかしそれよりも早く奥様に釘を刺されてしまいました。

「行ってきますのキスはなし。」と。

ここで、ダーリンの不機嫌度は更に上がってしまいました。

ダーリンの不機嫌度数を10が最高値とすると、さっきのおはようのキスを唇にもらえなかったことで、

現在のダーリンの不機嫌度数は6です。

そして、そんなダーリンの不機嫌度をさらにあげるかのようにして奥様は、

「下のコンビニで朝ご飯買ってくるから、鍵閉めてきてね。」

とダーリンを置いて、さっさと行ってしまいました。

奥様はマンションの下にあるコンビニで、二人分の朝ごはんを持ちレジに向かいました。

奥様は上のマンションに住んでいるのでこのコンビニを頻繁に利用します。

なのでここでアルバイトをしている彼とは顔なじみなのです。

そして今日もレジには顔なじみのアルバイトの彼がいます。

「おはようございます。今日も暑いですね。」

「おはようございます。毎日暑い日が続きますけどお仕事がんばって下さいね。」

彼はいつも爽やかな笑顔でよく挨拶してくれるので、奥様も挨拶をします。

そして会計を終え、商品をもたらします。

「ありがとうございました。」

「じゃあまた。」

奥様はコンビニを出て、ダーリンのところまで行きました。

そして奥様がダーリンを見るとダーリンは不機嫌な顔をして奥様に言いました。

「あいつ絶対に明里に気がある。」

「なに言ってるの、ありえないよ。あの人はすごく愛想のいい定員さんだよ。」

奥様はダーリンのやきもちには取り合いません。

慣れっこな奥様はいつもダーリンのやきもちには付き合っていないと、軽く流します。

「今度からあいつの居るときには俺が行く。」

ダーリンの不機嫌度は奥様と定員の楽しそうな様子を見て、マックスに到達してしまいました。

「あの人わたしには翔がいること知ってるよ。」

さすがの奥様もダーリンの不機嫌度をなんとか下げようとします。

「でも俺たちが結婚してることは知らないだろう。」

「そうだけど。でも関係ないよ。ずっとわたしにとっての一番は翔だけだから。」

「ねっ。」

「……………」

奥様に殺し文句とも言える台詞を言われたダーリンはというと一瞬呆気にとられ、

そのあと下を向いてしまいました。

よく見るとダーリンの頬が少し赤くなっています。

どうやら、ダーリンは照れている様子です。

そんなダーリンを置いて奥様は先に学校へと急ぎます。

「翔、早くー。」

奥様に呼ばれて我に返ったダーリンは奥様を追いかけます。

「今日のお昼は学食で食べようね。」

「わかった。」

ダーリンは先さっきので照れた顔を奥様に見られたくないのか、

奥様のほうを見ないでぶっきらぼうに答えます。

二人は急いで学校に向かって歩き出しました。

さてさてこの二人ですが、先ほどはダーリンのほうが一枚も二枚も上手と言いましたが、

本当のところはどうなのでしょう。

まあどうでもいいですかね。この二人が幸せなら。

きっとこの二人にとってはやきもちも甘いスパイスにかわってしまうことでしょう。

ダーリンはやきもちやき。

<http://p.booklog.jp/book/31805>

著者：椎名花穂

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/meltwithyoukiss/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31805>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31805>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.